

石内都の写真における「触覚性」とその意義

——《Chromosome XY》(1995年)を起点として

五十嵐 美憂 (大阪大学)

本発表は、写真家・石内都が男性身体のパーツを接写した《Chromosome XY》(1995年)に見られる「触覚性」の意義を明らかにし、作品の新たな解釈と再評価を試みる。本作は展覧会への出品歴が少なく、批評言説の蓄積もほとんどないが、石内が様式と主題の両方において飛躍を遂げ、それ以後の作品に触覚性という特性をもたらした画期的な作品である。本発表では本作の分析と、石内の他作品との比較からこのことを示す。

《Chromosome XY》の様式的な特徴は、被写体への極端な接近である。本作において、石内は男性の皮膚や体毛、骨格などにカメラレンズの焦点が合わなくなるほど接近し、被写体を画面いっぱいに写しとった。本作の写真集が『さわる』と題されたように、この特徴は触覚性—視覚を通して被写体の表面に触れているような感覚—を強く喚起する。石内は前作の《1・9・4・7》(1990年)でも女性の手足に近接して撮影しているが、本作の方がさらに距離が近い。また前作では被写体との距離がほぼ一定であるのに対し、本作ではばらつきがある。以後の作品でも被写体との距離には幅があるが、これは本作で様々な撮影距離を試した結果、被写体によって最も望ましい距離の選択が可能になったためと考えられる。

こうした様式的な展開は、主題が男性であったことに起因する。それまで石内は《絶唱、横須賀ストーリー》(1977年)では自らの故郷、《Apartment》(1979年)では家族で暮らしたアパート、《1・9・4・7》では同じ生年の女性と、一貫して「私」に関係のある対象を選んできた。その制作の軸は自身の「女性性」に対する複雑な思いであり、《1・9・4・7》では「私であったかもしれない」女性たちの手足を強い共感を持って写し出している。一方、石内が「私でない人」と断言する男性に対しては同様の感情を持ち得ず、それが大胆な男性身体の客体化と様式上の実験を可能にしたと考えられる。その後の、母の遺品を写した《Mother's》(2002年)、他者の傷に寄り添う《SCARS》(2006年)、被爆者の遺品をテーマにした《ひろしま》(2007年-)という制作の展開は、絶対的他人たる「男性」と対峙したことで、石内が徐々に「私」と必ずしも重なり合わない対象へと歩み寄っていく道程とみなすことができる。

極端な接写が喚起する触覚性は、本作以後の作品にも変化をもたらした。以後、石内のプリントには実寸よりも大きいものが増える。《Mother's》や《ひろしま》で見られるように、全体を写す引きの撮影であっても実寸以上の大きさにプリントされることで、鑑賞者は被写体の表面に視覚的に触れ、その質感を共有しているかのような親密な感覚を覚える。この触覚性が生む親密さにより、被写体はそれ固有の文脈を持つ特定の存在から、観者それぞれの解釈と感情移入が可能な普遍的な存在へと転換される。《Chromosome XY》は、こうした石内作品の特性の起点となった、彼女のキャリアの分岐点に位置付けられる作品と言えよう。